



## 加藤 秀一教授 (専攻 性現象論)



### (1) 社会学とはどのような学問とお考えですか。

---

「社会学すること」はまず社会というものの存在に〈驚く〉ことから始まる。どこにもその姿は見えず、手で触ることもできないのに、社会と名づけられた何ものかは確かにそこにあって、いつのまにか、あなたの生に絡みついている。そこから逃げだそう、抵抗しようとしても、そうすること自体がもう社会によってかたちづくられた振る舞いである。それに気づき、驚き立ちすくむこと。——「ふっと手が空をつかみ、引き戻す／誰もいない」(ニューエスト・モデル「底なしの底」)

けれどもそれはただの出発点にすぎない。「社会学すること」の本質とは、社会という観念そのものを〈疑う〉ことにあるのだから。〈私〉をかたちづくり、あるいは呪縛する力の交錯に対して、根源的な疑問をつきつけること。なぜそれを「社会」と呼ぶのか。社会とは一つなのか、複数なのか、それとも不可算なのか。社会が個人をつくるのか、個人の集合が社会なのか。社会に境界はあるのか。その外部はあるのか。社会と国家との関係は。社会を成り立たせる秩序とは何か。殺し合いをすることは無秩序なのか。……

こうした根源的な問いを忘れない人だけが、いわゆる現実の問題についての問い、すなわち社会の内部における問いを、真にエキサイティングなものにすることができる。「なぜ」と問うことなく、現実を知ることなどできない。なぜ戦争がなくなるのか。なぜ学校なんてものがあるのか。なぜ親が子どもを育てるのか。なぜモノを手に入れるのにお金が

いるのか。なぜ金持ちと貧乏人がいるのか。なぜ人間には女と男がいるのか？ 世界はまったく別のあり方をしているにもかかわらず、その無数の可能性から一つだけが選ばれて、目の前の現実としてある。いったいそれはなぜなのか？

だがそのような問いはやがて、問う〈私〉に刃向かってくるだろう。私はなぜ社会を〈疑う〉のか？ それもまた社会によって駆動された欲望なのではないか？ 〈疑う〉ことが逆に社会をつくりあげ、安泰にさせているのではないか？ —— 一步一步問いを積み重ねて、その地点まで自分の足でたどり着いたなら、あなたはもう一流の〈社会学者〉である。そこに到る認識の旅の途上で、あなたはあなたの生にかかわる一切と、すなわち誕生や愛や性や死や、信頼や友情や契約や裏切りや、モノや言葉やビジョンや音楽や、そして〈私〉や世界や知のすべてと遭遇するはずだ。ぼく自身はといえば、いまだなお、社会学の入り口辺りでキョロキョロとまわりを見回している学生くずれにすぎないのだけれど。

(2) 先生が専攻されている、あるいは、この大学で学生に教えられている社会学とはどのような学問ですか。

---

① 《性現象論》では、「性別」(ジェンダー)や「性欲」(セクシュアリティ)といった概念に関わるあらゆる現象をあらゆるレベルで分析することをめざしています。講義では、そうした作業の一端として、「性別」という概念そのものの成り立ちから始め、インターセックス、トランスジェンダー、同性愛と異性愛、性暴力やドメスティック・ヴァイオレンス(DV)、労働上の性差別や性役割分業、近代家族と国家の関係といったさまざまな現象について解説します。

② 《生命の社会学》では、ジェンダー／セクシュアリティ問題の根源を探るという関心から、「生殖」すなわち人が人を生むこと（妊娠・出産）また人が人から生まれること（誕生）の社会的な意味を考察しています。具体的には、生殖補助医療や遺伝子工学と呼ばれるテクノロジーをめぐる現状、そしてそれらがもたらす倫理的な問題群について考察することが目下の主たるテーマです。他に講義では、「生命」や「いのち」といった観念そのものの歴史的背景、近代の生物学の成り立ち、ダーウィン主義進化生物学の基礎知識についても論じています。

### (3) 1～2年次で読んで欲しい本

---

#### 1. 『ハックルベリー・フィンの冒けん』（柴田元幸訳 研究社

1885）日本では明治時代の中頃に発表された、アメリカ小説というジャンルそのものをつくったとさえ言われる不朽の名作。家族と奴隷制の暴力からそれぞれに逃亡を試みる少年ハックと黒人サムが繰り広げる破天荒な冒険の旅はスリル満点の面白さだが、それ以上に、少年ハックが呟く純朴な言葉たちに宿る「精神の自由」の崇高さこそが、本作をあらゆる文学作品の最高峰たらしめている。「精神の自由」のありかを学ぶこと以外に、書物を読むことの意味などがあるだろうか。最新の邦訳を挙げておいたが、角川、光文社、岩波などの文庫本でも読める。どれを読んでも作品の本質をつかむことは十分にできると思う。本書の約五〇年後に書かれたもう一つのアメリカ小説の名作、二十世紀初めの貧しい農民たちの苦闘を描くスタインベック『怒りの葡萄』（早川文庫ほか）とともに、読むものを〈現実〉へと誘い出す文章の底力を感じてほしい。

2. 『祈りの海』(グレッグ・イーガン 早川文庫 2000) 現代SFの最高峰であるオーストラリアの作家の短編集。私が存在しているとはどういうことか。私が私であるとはどういうことか。愛とは何か。遺伝子が人間の本質を決めるのか。宗教と科学は敵対するものなのか。自由とは単なる幻想なのか。——本書に収められた傑作群を読むあいだ、こうした問いが途轍もないハイテンションであなたの頭脳を駆けめぐらさるだろう。そしてそれらは、私たちの誰一人逃れられない今日の世界を砕づける問いなのだ。
3. 『翔太と猫のインサイトの夏休み——哲学的諸問題へのいざない』(永井均 ちくま学芸文庫 2007/1995) イーガンを読んで哲学的な問題に魅入られたら、次は数多ある哲学入門書の中から本書を手にとって見るとよい。夏休みを迎えた少年と人語を喋る不思議な猫が「いまが夢じゃないって証拠はあるか」「自分という特別なものがあるのはどうしてか」「(なにかが)正しいといえる根拠はあるか」「自分の存在に意味はあるか」という4つの問題をめぐって繰り広げる対話を追いかけていけば、明瞭な言葉でこの〈世界〉のしくみを解き明かそうとする現代哲学の影をちらりと視界にとらえることぐらいはできるはずだ。(その先にあるのはどこまでも続く深く鬱蒼とした森ばかりかもしれないけれども。)
4. 『時間の比較社会学』(真木悠介 岩波書店 1981) 「時間」はとりわけ哲学者たちによって取り上げられてきたテーマだが、それは私たちの生の最も根源的な条件である以上、社会学の、そして人間解放の理論にとっても究極の主題であるはずだ。本書は茫然とするほどの広い視野で近代的な「時間」という経験の成り立ちを解明した社会学の一つの到達点であり、おそらく同時にその限界を示してもいるように思われる。現在は岩波現代文庫で読める。同じ著者が別名義で同じ主題を変奏する『宮沢賢治—存在の祭りの中へ』(岩波書店)や近著『社会

学入門——人間と社会の未来』(岩波新書)から入るのもいいだろう。

5. 『幕末・維新(シリーズ日本近現代史①)』(井上勝生 岩波新書 2006) 僕がいまこの原稿を書いている2018年は明治維新150周年にあたり、「維新」と呼ばれる事件を主導した長州藩を一国の総理大臣が誇らしげに称えている。そうした茶番劇の先にあるものは何なのか、それを見極め、私たちの未来を塞ごうとする勢力に抗していくためには、歴史のあらゆる瞬間の事実と意味を問い直しつつけることが不可欠だ。そもそも「維新」と呼ばれるものはいかなる出来事だったのか。それは良いことだったのか。それはいかなる別の未来の可能性を塞いでしまったのか。こうした本質的な問題は、まだけっして解かれてなどいない。本書は最前線の歴史学研究をふまえて明治維新の全体像を描き直す刺激的な啓蒙書であり、高校までの古く断片的な日本史の知識をアップデートするのに好適である。
6. 『単一民族神話の起源』(小熊英二 新曜社 1995) 日本とか日本人とかと僕らは気軽に言う。しかしそんなものを見た人間は一人もいやしないのだ。それにもかかわらず民族国家という「想像の共同体」が一度できあがってしまえば、そこには後から「起源」が書き込まれ、太古から続く不動の実体のように錯認されてしまう。本書は、このように倒錯的な「日本人＝単一民族」という神話とともに、それに対する紋切り型の批判をも別の膠着した神話として批判する好著。他に、「日本」という言葉が使われるようになった歴史を検証する見直す網野善彦『「日本」とは何か』(講談社)、超管理社会としての江戸と自由人・葛飾北斎の闘いを描いた櫻井進『江戸の無意識』(講談社現代新書)も併せて読むとよいだろう。
7. 『はじめての進化論』(河田雅圭 講談社現代新書 1990) もはや進化論(進化生物学)についての一定の理解なしに「社会」や「人間」について何かを言うことはできない。本書は日進

月歩の自然科学についての解説書としてはかなり古くなってしまったが、進化論の基本的な考え方を非常にしっかり解説してくれているし、また著者が自らのウェブサイトで全文を公開してくれているので、最初の一步には最適である。これで初歩の知識を学んだら、次の一步として、自然科学と人文学がクロスする地点で進化論の壮大なビジョンを語る吉川浩満『理不尽な進化——遺伝子と運のあいだ』（朝日新聞社）、そして僕自身はまだ読んでいないのだが、すこぶる面白いと評判のS・ムカジー『遺伝子——親密なる人類史（上下）』（早川書房）をチェックしてみよう。

8. 『生命学に何ができるか』（森岡正博 勁草書房 2001）進化論も含め、近年ますます「生命」という文字を目にする機会が増えている。不妊治療・代理出産・出生前診断といった新しい生殖補助医療をめぐる諸問題も、「生命」や「命／いのち」といった言葉とともに論じられている。その焦点のひとつである障害者の選別的中絶の問題について、森岡は適切な距離をとって重厚な議論を展開している。僕はその思想そのものには強い異論をもっているが、本書が真剣に読むに値する本であることは疑いえない。さらに、本書の主題を歴史的に位置づけるために、米本昌平『遺伝管理社会』（弘文堂）、市野川容孝・ぬで島次郎・松原洋子・米本昌平『優生学と人間社会』（講談社現代新書）、加藤秀一『〈恋愛結婚〉は何をもたらしたか』（ちくま新書）を薦める。
9. 『第三の性』（森崎和江 河出文庫 1965）おそらくここにはすべてがある。「性」などともはや括弧をつけなくて書きたくなるような、性をめぐるすべてが。未だその可能性を汲み尽くされていない、日本のフェミニズム史上に屹立する名著。願わくば、あなたが、このような果実を生み出してきた日本のフェミニズムの歴史を大切に感じてくれればいいのだが。本書を媒介として、北原みのり編『日本のフェミニズム』（河出書房新社）、井上輝子・上

野千鶴子・江原由美子編『日本のフェミニズム(全8巻)』(岩波書店 一九九五)などで先人たちの苦闘の足跡を知ってほしい。

10. 『内省と遡行』(柄谷行人 講談社学術文庫 1985) 軍隊や会社組織から「サークル」「ママ友」「SNS」のような日常までも侵す、ジクジクと閉ざされた「仲間」という牢獄。その裏面でも「探す」対象にとどまり続ける、「本当の私」という言い訳。戦前も戦後も何も変わらない、自閉と排除の暴力を原理とする〈共同体〉から、いかにして脱出するか——「ニーチェの言う『巨大な多様性』としての《外部》、事実性としての《外部》」へ。若き柄谷が予告した〈遡行〉の道ゆきは、宿命的に挫折しつづけるほかないだろう。だが、本書がたとえ今のあなたにとって難解に過ぎるとしても、この闘いがあなた自身の若さによって引き継がれ、繰り返し更新されることを願う。

#### (4) 3～4年次で読んで欲しい本

---

※こちらのリストは、僕が社会学部に着任した直後、二十代の終わり頃に書いたものを概ねそのままにしてある(一部は差し替えた)。その理由の一つは、これらの書物がどれも今なおその価値を失わない古典的名著であること。もう一つは、学生諸君にまだ近い年齢の人間が書いた読書ガイドであるという点にそれなりの意味があるかもしれないことである。

1. 『パリの憂愁』(C・ボードレー 福永武彦訳 岩波文庫 1869)

『地獄の季節』(A・ランボー 小林秀雄訳 岩波文庫 1873)  
社会学は、「近代社会」の自己意識として誕生し、それゆえ「近代とは何か」という問いこそが、「社会学する」ことにとってのアルファでありオメガであると言われる。そうだとすれば、「近代人」で

あることの端緒と極限とを同時に示すこの二つの詩集から、すべては始められるべきだろう。

2. 『資本論 第一巻』(K・マルクス 大月文庫ほか 1873) 近代社会とはまた「資本制」の社会でもある。ただし資本制とは、個別の社会それぞれの特徴ではなく、民族や国境を自らの内部に組み込みつつ、それらを超えて拡張し続けるシステムのことだ。それは未だ謎に満ちているが、ただひとつ明らかなのは、それには外部がないということである。言い換えれば、舞台と舞台裏と観客席はあるが、劇場の外に出ることはできない。マルクスは、少なくともここが劇場の内部であることを、僕らに教えてくれた。それはまったく驚くべきことだ。だが今も僕らは、ここで死ぬまで、いや「死」をさえも、踊り狂うほかないように見える。
3. 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(M・ウェーバー 岩波文庫 1905) 資本制は「死」への恐怖から生まれ、いったん成立してしまえば、僕らの「生」を否応なく呪縛する牢獄と化す。ごく簡単に言うところということが書いてある、社会学における古典中の古典。歴史書としては多くの異論を喚んできたようだが、資本制と「死」との根底的な結びつきを剔抉するその視線の射程の長さにおいて、今も読者を魅了する、鬼気迫る一冊。そういえば、貨幣は少しだけ死に似ている。どちらも、あらゆるものと引き換えられ、またいかなるものとも引き換えられない。
4. 『快感原則の彼岸』(G・フロイト 人文書院『フロイト著作集 六』 1920) フロイトについては、晩年の『精神分析入門』(新潮文庫ほか)から入るのがまっとうなやり方だろうが、ここでは僕がかつて最も仰天した著作(と言ってもフロイトの全著作を読んだわけではないが)を薦めたい。この作品で語り出されるのは、名前ばかり有名な「生の欲動」と「死の欲動」というあの概念である。ただしそれは、しばしば誤解されていることだが、攻撃性だとか母性本能だとかいったありふれたお喋りとは次元が違う話なのだ。ここで展開されるのは、われわれ人類を含むあらゆる生



命現象をその土台において一個の矛盾たらしめるような、全く相反する二種類の欲動の物語であり、「社会」の内側にちんまり収まるような「何とか本能」論とは全く水準を異にする、文字通りの破壊的な形而上学である。この身もフタもない異様な法螺話が、しかしどれほどの衝撃を二〇世紀人に与え、認識の転換を迫ってきたことか。

5. 『知覚の現象学(1、2)』(M・メルロ＝ポンティ みすず書房 1949) 私の経験。それは私に属するのでもないし、経験される対象に属するのでもない。経験に先立って、「私」や「対象」がでんと存在するわけではないのだから。「私の経験」を何ものかに還元し、その属領とすることを拒絶するために、むしろ日常的な意識—世界を「経験」そのものへと還元すること。しかも厳密極まりない方法をもって。E・フッサールが創始した現象学の企てとは、およそこういうことである。メルロ＝ポンティが喝破したように、それは精神の絶えざる辛苦ともいうべき、困難な試みであった。けれどもそれに対する現在の批判は、それが真の困難を回避する道化的な困難さであるとみなしているかのようだ。
6. 『悲しき熱帯(1、2)』(C・レヴィ＝ストロース 中央公論新社 1955) 「構造主義」は、数学と言語学に由来するものだが、レヴィ＝ストロースによって社会科学(人類学)の手続きに導入され、めざましい成果をあげた。そこでは見かけ上は異質な諸社会を通約する変換規則としての「構造」が発見され、その驚くべき精密さによって、「未開」から「近代」へと一直線に伸びる(歴史)(=進歩)の物語は風化を始めたとされる。その(最初で最大かつ最後の?)達成は大著『親族の基本構造』(青弓社ほか)だが、今後も長きにわたって広く読まれるべき名著といえればむしろ本書だろう。硬質の思索が香気高い文章で綴られていく自伝的紀行文。南米での調査行をめぐる叙述、なかでも滅びつつあるナンビクワラ族の人びとの慈しみあう姿の描写は苦くも感動的だ。

7. 『哲学探究』(L・ヴィトゲンシュタイン 大修館書店 1936) ことばの「意味」は客観的な事物を反映しているのではないが、他方それは、私やあなたの内面やら感情やらを反映するのでももちろんない。簡単なことだ、だって私やあなた(もちろん誰であっても)が生まれる前からことばはあったではないか。しかしそうだとすれば、ことばの「意味」とはいったい何処にあるのだろうか? ヴィトゲンシュタインはこの泥沼のような問いを回避して、問いそのものを変更する。彼が「意味」を拒否して「使用」を持ち出すのは、言葉の力をどこか別の場所ではなく、われわれの諸実践そのものの中に見ようとするからだ。こうしてことばは「事物」や「人間」(という観念)の呪縛を解かれ、われわれの〈生〉と忠実に外延を等しくすることになる。そこでは言語の根源的なく他者性もまた明るみに出されるだろう。これは別に矛盾ではない。われわれの〈生〉ほど、われわれ自身から遠い存在はないのだから。
8. 『人間の条件』(ハンナ・アーレント ちくま学芸文庫 1951) 二〇世紀は大量虐殺の時代であった。こんな断定は軽薄かもしれないが、それでも一度はそう言い切らねばならないとも思う。そうしなければ、私たちはこの世界への疑問を切実なものにすることができないだろうから。自らもナチスに迫害された亡命ユダヤ人哲学者アーレントこそは、この問いをみずからのものとして正面から全身で受けとめた人である。だがそれ以上に驚くべきなのは、彼女が「なぜ」という問いのシンプルさに見合う明快な「答え」を、ごまかしなしに出していることだ。すなわち、大量虐殺を生み出した原動力は「生命尊重」という思想だった。人間はみな同じ価値の命をもっている——そのような思想こそが、数百万人、数千万人の無惨な死を招き寄せたのだ。この息詰まるような「答え」は、人々をいたずらに脅かす不謹慎な逆説に過ぎないのだろうか。少しでも気になったら、本書そして大著『全体主義の起源』(みすず書房)ほかの著作を繙き、アーレントの強靱な思索を辿り直してほしい。

9. 『性の歴史 I 知への意志』(M・フーコー 新潮社 1976) 進化論や生命への関心も含め、僕の「性現象論」に絶え間なく靈感を与え続けてくれる、性と生をめぐる透徹した分析の目録。僕はいまなおフーコーの不肖の弟子(文字通り!)であるに過ぎない。「性」を神秘化するあらゆる言説と闘うために――すなわち少しだけ「自由」になるために読むべき書物。とはいえ、かなりの関連知識を要求する本だから、まずは講義録の『ミシェル・フーコー講義集成(6)社会は防衛しなければならない』(筑摩書房)から入るのがよいだろう。
10. 『イエスという男〔増補改訂版〕』(田川健三 作品社 1980/2004) 「イエスはキリスト教の先駆者ではない。歴史の先駆者である。……そして歴史の先駆者はその時代の、またそれに続く時代の歴史によって、まず抹殺されようとする」。抹殺され、牙を砕かれ、骨抜きにされてきた激越なく逆説的反抗者)、ナザレのイエスの言葉を、われわれはいかにして甦らせることができるのか。これがあなたに、そして僕に課せられた問いだ。ベンヤミンが言ったように(「歴史哲学テーゼ」『暴力批判論』晶文社/岩波文庫)、われわれが解放されない限り、死者たちもまた彷徨い続けるほかはなく、そして今も、「敵は勝ち続けている」のだから。

[番外編]『じみへん』(中崎タツヤ 小学館 たぶん、全15巻)

人間のおかしさと哀しさの淵源をあらゆる角度から描き尽くしたこれらの傑作群に一度も魂を震撼させられなかった人は、社会学にはあまり向いていないかもしれない。作者の断筆が残念だ。

(5) 先生の代表的な著書または論文を二つか三つ教えてください。

---

「二つか三つ」といわず、もっとたくさん挙げさせてもらいます。

1. 「『風の谷のナウシカ』試論——〈追憶〉と死者たち」(『季刊 窓』第 22 号、窓社、1994 年)
2. 「女性の自己決定権の擁護」(江原由美子編『生殖技術とジェンダー』勁草書房、1996 年)
3. 『性現象論——差異とセクシュアリティの社会学』(勁草書房、1998 年)
4. 「身体を所有しない奴隷——身体への自己決定権の擁護」(『思想』3月号、2001 年)
5. 「フェミニズムを古びさせるのは誰か？」(『大航海』39号、2001 年)
6. 「ジェンダーの 20 世紀」(『岩波講座 20 世紀の定義 8 マイナーの声』岩波書店、2002 年)
7. 『〈恋愛結婚〉は何をもたらしたか——性道徳と優生思想の百年間』(ちくま新書、2004 年)
8. 『図解雑学 ジェンダー』(石田仁・海老原暁子との共著、ナツメ社、2005 年)
9. 若桑みどり・皆川満寿美・加藤秀一・赤石千衣子[編著]『「ジェンダー」の危機を超える!——徹底討論!バックラッシュ』(青弓社ライブラリー、2006 年)
10. 『ジェンダー入門』(朝日新聞社、2006 年)
11. 「性的身体ノート——〈男語り〉の不可能性から〈新しい人〉の可能性へ」(荻野美穂[編]『資源としての身体——身体をめぐるレッスン2』岩波書店、2006 年)
12. 「遺伝子決定論、あるいは〈運命愛〉の両義性について——言説としての遺伝子/DNA」(柘植あづみ・加藤秀一[編著]『遺伝子技術の社会学——テクノソサエティの現在 I』文化書房博文社、2007 年、第 1 章)
13. 『〈個〉からはじめる生命論』(NHKブックス、2007 年)
14. 「概念と方法 性／愛、セックス／ジェンダー」(飯田隆ほか[編]『岩波講座哲学 12 性／愛の哲学』岩波書店、2009 年)

15. 加藤秀一 [責任編集] 『生——生存・生き方・生命（自由への問い 第8巻）』（岩波書店、2010年）
16. 『はじめてのジェンダー論』（有斐閣、2017年）